

【最優秀賞】
「職業連鎖」

六年 小松 潤

ぼくは、働くことの意味について考えてみることにします。

ぼくは、働くことの意味は、単純にお金をかせぐことだけではないと思います。職業の一つ一つが支え合ってお互いが豊かになるために働くのではないかと思います。

例えば、自動車工業にしても、一台の乗用車が自分のものになるまでの流れを考えてみると、自動車には何百もの部品があります。その部品一つ一つを作る仕事があります。そしてその部品を組み立てる仕事があります。そして、できあがった車を宣伝したり、売ったりする仕事があります。部品を作る仕事の一つが抜けてしまつたら、車をつくることはできません。車を作るのができても、車を売る仕事が出来なくなると、ぼくたちの車は届きません。

このように、働くことは、お互いが支えあつて互いに

豊かになることなのではないかとぼくは思います。どの仕事にもこのことは言えるのではないかと思います。まるで、食物連鎖に似ているので、「職業連鎖」と言ってもいいのではないのでしょうか。

ぼくは、将来農業をやりたいと思っています。農業は第一次産業と言われています。第一次産業も、支え合いが大事だと思います。農業は、天候や気温の状況によって作物の収穫が大きく左右されます。また、台風などの災害が起きると大きな打撃を受けます。ぼくの以前住んでいた石巻市でも農地のほとんどが津波にやられてしまい、農業を再開するのが難しい状況にある農家の方が何人もいます。聞いたことがあります。でも、そんな状況でもあきらめず、また農業を再開している農家の方もたくさんいることも知っています。そんな農家の方の話を聞くと、自分の力だけでは無く、周りの協力があつたからだということがよく分りました。周りと協力しあうことで、難しい

と思われた津波からの復興も可能になりました。農業も工夫しだいで大きな発展ができるのではないかと思います。働くということは、お金をかせぐことを第一に考えるのではなく、周りのみんなと協力し、支え合うことであり、働くことで、自分の幸せと、みんなの幸せをつくっていくことなのではないかと思っています。

【優秀賞】
「お父さんの背中」

六年 吉野 莉央

ぼくのお父さんは、おそば屋さんをしています。七ヶ宿街道沿いのお店です。土曜日や日曜日はもちろん、春や秋の観光時期もとても忙しく働いています。

七ヶ宿の名産の一つにそばがあります。そばは夏に白い花をつけて、秋に匂をむかえる食べ物です。七ヶ宿産のそばと七ヶ宿から湧き出るおいしい水を使って作るお父さんのそばはとてもおいしいです。お父さんの作るそばのお

いしさの秘密は二つあります。一つ目は、水です。水は七ヶ宿の中で一番おいしい水が湧き出ている場所に行つてくることができます。水くみはぼくも一緒にしています。山の中にあつて、周りは木でいっぱい場所です。山がおいしい水を作ってくれているのだと思います。山の栄養がたくさん入った水です。七ヶ宿のそばもこの水で育つたものだから、そばと水の相性がよくておいしいそばができるのだと思います。おいしいそばの秘密の二つ目は、お父さんのそばにかけける愛情だと思っています。どんなに忙しくても絶対に手を抜いて作つたりしません。一つ一つの作業を丁寧に行つておいしいおそばを作っています。お父さんがお店に出ているときは、とても真剣な表情です。お客さんには笑顔だけれど、そばを作っている時はきりつとした表情に変わります。ぼくは、お父さんが作るおそばが一番好きなのは、天ぷらそばです。天ぷらも、七ヶ宿で採れた山菜や野菜を使つて

作ります。天ぷらそばを食べているお客さんの顔を見ていると、みんなにこにこした顔で食べています。やっぱりお父さんの作るおそばはおいしいんだと思っています。

そんなお父さんをつつと見てきて、おそば屋さんで働いているお父さんはとてもカッコいいと思います。いつも一生懸命で、お客さんに、「おいしい。」

「また来るね。」

などと言われているお父さん。お客さんを自分の作るおそばで笑顔にできるお父さんの姿はぼくにとてもはあこがれです。ぼくも、将来、お父さんみたいなおそば屋さんになりたいと思っています。



【優秀賞】
「人を守るじいちゃん」

六年 鮎川 拓己

誰も忘れることができない災害が宮城県に起こりました。東日本大震災です。僕が住んでいる七ヶ宿町は元々地盤が強固な土地だったので、沿岸部に比べると通常の生活に戻るのもとても速かつたのを覚えています。

電気が復旧し、沿岸部の被害を見た時にはこれが本当に同じ宮城県内で起こつたことなのか信じられない気持ちでした。

毎日流れていた被災地の様子で僕の目に飛び込んできたのは、自衛隊の人達の一生懸命な姿でした。津波で屋根に取り残されている人々を小さな小型ボートに乗って救出したり、ケガをしている人を救助して病院に運んだり、また、津波で犠牲になってしまった人々を捜索したりもしていました。(そんなことまでしなくてはいけなのかな)と僕はとても驚きました。でも、自衛隊の方達が自分たちも危険かもしれない災害の場

所で活動してくれたおかげで別れた家族と出会うことができるのだなということがわかりました。また、避難所で電気を設置したり、あたたかいお風呂を設置したりしている場面も目にしました。自衛隊の人たちのおかげで、たくさんの人たちが助かり、安全な生活を取り戻すことができています。人を守る仕事ってこういうものなのだということが僕なりに分かつたような気がしました。

僕はそんな自衛隊の人たちの姿を見ていて僕も将来、自衛官になりたいと思うようになりました。自衛官には陸・海・空の三種類の職種があることを学校の社会の授業で勉強しました。僕は、やはり陸上自衛隊に魅力を感じます。学校の活動で、自衛隊の駐屯地に見学に行ったこともありました。その時も、陸上自衛隊の方達が僕たちいろいろなことを教えてくれました。力強い感じの人ばかりでした。みんなとてもカッコよかったのを覚えています。

【入選】
「日本と世界の架け橋に」

六年 秋葉 珠莉

私にはふるさとが二つあります。一つは父の国であり、今住んでいる日本。もう一つは、母の国である中国です。

私の夢はパイロットです。パイロットになりたいと思つたきっかけは、母のふるさとに里帰りをする時に乗った飛行機を利用したときのことです。中国に里帰りするときは、必ず飛行

機を利用します。はじめは、飛行機に乗るのが怖かつたのを覚えています。空港から離陸するときの衝撃や、耳がキーンとなつてしまうことなど、なかなか慣れることができなくて、飛行機が怖いとすら思つたことがあります。

しかし、そんな中、一人のパイロットの方がアナウンスをしてくれました。キャビンアテンダントの方も優しく丁寧にわたしたち乗客に接してくれました。何度も飛行機に乗つて分かつたことですが、いつ、どの飛行機に乗つても、私たち乗客を安心させてくれるアナウンスや、対応は変わることはありませんでした。細かいことにも気と目が配られていて、飛行機の旅をとて快適に過ごすことができるのです。また、当たり前なのかもしれないけれど、時間も遅れることなく、ぴたりと到着します。とてもすごいことだと思います。

また、飛行機を利用する人を見ていると、いろいろな人がいることも分かります。

した。私と家族のように、里帰りをする人、仕事でその土地を訪れる人、観光で訪れる人、みんなそれぞれです。飛行機は、いろいろな人の思いも一緒に乗せて飛んでいるものなのかなと思います。そんな思いや喜びを乗せて飛ぶ、パイロットという仕事にとっても強いあこがれを持ちました。

パイロットの仕事は、とても責任のある仕事だと思います。たくさんの方の命を預かり空を飛ぶ。また、日本と世界をつなぐ架け橋のような役目もしているのではないかと思います。パイロットになるためには、日本語だけではなく、外国語の知識も必要です。英語、中国語などたくさん国の言葉も勉強しなければいけません。また、日本の文化もきちんと勉強して、すばらしい日本の文化を伝えられるようにするために、日本の心である「おもてなしの心」もしっかりと勉強しておきたいです。私もいつか、日本と世界をつなぐ架け橋の一人になりたいです。